(1)　(明治25年3月28日第3種郵便物認可・昭和24年2月17日運輸省特別扱承認第16号)　THE JOMO SHIMBUN　平成元年(1989年)3月30日(木曜日)　第33820号　(日刊)

わたらせ渓谷鉄道が開業

沿線主要駅で出発式

桐生―間藤 間44・1キロ 黒字転換は13年後

「わたらせ渓谷鉄道」(山田郡大間々町、松田雷司社長)が、二十九日開業した。前日に開業したJR足尾線を引き継いだ同鉄道の営業区間は桐生―間藤(栃木県足尾町)間の四十四・一キロ。桐生駅や大間々駅、それに沿線の主要駅では華々しく出発式が開かれ、また、新しく設置された運動公園駅など三つの新駅では、地元の商工会などによる通過式が行われた。"鳴り物入り"で開業したわたらせ渓谷鉄道が、果たして採算ベースに乗れるかどうかは、十三年間、沿線住民の"悲願"として鉄路は残ったが、その前途は楽観は出来ない。

大間々駅ホームで盛大に行われた出発式

同日午前八時半、桐生駅一番ホームで、約二百人の市民が見守る中、出発式が行われた。松田社長、大沢義雄市長らによるテープカット、くす玉割りの後、鉄道マニアら約七十人を乗せた満員のレールバスは、農良鉄道沿ぞいに向けてホームを滑り出した。

わたらせ渓谷鉄道は、昭和六十三年十月に、旧足尾線を第三セクター方式で引き継ぐことで設立された。この間、新車両の導入や運賃設定など開業準備を進めて来た。そして、利用者を足尾線の年間六十四万千人(プラス六十二万人)見込み、そのために沿線の観光施設をめぐり、各種イベントの開催を予定している。

しかし、運賃一つを取っても、旅客運賃が据ヂ置かれ、三四・一%アップ、今後も隔年ごとに二%ずつ引き上げ、通勤定期も七%・九%も大幅アップとなった。通勤は一日一往復の通学客を含めて、一万分が補助されるとはいえ、その新料金は六十キロ程に達する。子供でも三千円近くの負担となる。通学定期は七・九%も大幅アップとなった。通勤は一日一往復の通学客を含めて、一万分が補助されるとはいえ、その新料金は六十キロ程に達する。子供でも三千円近くの負担となる。

前橋市は二十九日までに、今後十年間の行政指針となる第四次総合計画の基本構想をまとめた。同構想では、都市づくりの高齢化、国際化社会などを要請への対応策として、「活力ある総合機能都市」づくりの目標を掲げている。

この新計画は六十年度に始まった第三次計画の協調の成果を継承しつつ、新たな時代の要請に対応するため、「活力ある総合機能都市」と定義付けた。行政が一体となって、通学定期は七・九%も大幅アップとなった。通勤は一日一往復の通学客を含めて、一万分が補助されるとはいえ、その新料金は六十キロ程に達する。子供でも三千円近くの負担となる。通学定期は七・九%も大幅アップとなった。通勤は一日一往復の通学客を含めて、一万分が補助されるとはいえ、その新料金は六十キロ程に達する。子供でも三千円近くの負担となる。

活力ある総合機能都市

前橋市が基本構想 10年後の人口30万超

前橋市は、「活力ある総合機能都市」を目指す第四次総合計画の基本構想を、今年十年間の行政指針となる第四次総合計画の基本構想を隣年ごとに(二%ずつ)引き上げ、まとめた。同構想では、都市づくりの高齢化、国際化社会などを要請への対応策として、「活力ある総合機能都市」と定義付けた。行政が一体となって、通学定期は七・九%も大幅アップとなった。通勤は一日一往復の通学客を含めて、一万分が補助されるとはいえ、その新料金は六十キロ程に達する。子供でも三千円近くの負担となる。